

私は、2019年度在外研究員として、オーストリア共和国ウィーン市のウィーン大学イエリネク研究所で一年間研究を行いました。研究テーマは「ドイツ語圏ユダヤ系文学研究」ですが、詳しくは2017年度～2020年度に亘る科学研究費基盤研究(C)「＜第二世代＞ユダヤ系文学研究－1980年代以降のドイツ・オーストリアを中心に」における研究が中心となります。この研究では、ホロコースト犠牲者あるいは生還者を親に持つ世代のユダヤ系作家たちがどのような問題性を作品化しているかを扱うものです。在外研究時は、①この第二世代の作家たちと面会し、作品インタビューをさせてもらうこと②作品に関わる史跡（強制収容所跡地など）、記念碑（警告碑）、関連施設に直接赴き、資料収集を行うことを中心課題としました。

具体的な研究内容として、まず①では、第二世代を代表する作家ローベルト・シンデル氏、ドロン・ラビノヴィチ氏と特に親しくなることが出来ました。両者はウィーン応用芸術大学言語芸術学科でゼミナールを持っていたので、それを聴講させてもらうことにし、定期的にお会いし作品執筆についての話を聞かせてもらうとともに、彼らが大学生とのゼミナールの中で教授する内容に触れることも出来た。また、別途作品インタビューをさせて頂き（シンデル氏は“Der Kalte”、ラビノヴィチ氏は“Die Außerirdischen”について）研究にとって有益な情報を得ることが出来た。それらは2020年度中に論文として形にしたいと考えております。

また、ラビノヴィチ氏等にご紹介いただき、同じく第二世代の著名な映画監督であるルート・ベッカーマン氏にもインタビューすることが出来た。ベッカーマン氏は昨年“Waldheims Walzer”を製作しており、そのほか、同じくユダヤ系のユリア・ラビノヴィチ氏ともお話することが出来た。彼女はユダヤ系ではあるが、今日では自らがロシアから移住してきた経験を活かし難民の子供たちの支援を行っており、彼らを主人公とした小説“Dazwischen Ich”

も執筆しており、ユダヤ系作家の新展開として大変興味深いものであった。

他方、以前から研究上の交流のあるドイツ・バンベルク大学のイリス・ヘルマン教授ともより密に意見交換を行うことが出来た。バンベルク大学が毎年行っている詩学講義に参加し、ヘルマン教授の紹介で、今年度講師のオーストリア人作家ミヒャエル・ケールマイアー氏とも親交を深めることが出来た。ケールマイアー氏はオーストリア人でユダヤ系の出自ではないが、“Schwester und Bruder Lenoble“（2018）において、ユダヤ人兄妹のアイデンティティの危機を扱った作品を執筆しており、非ユダヤ系作家のユダヤ人二世代の物語として注目していたため、彼と交流を持つことが出来たのはとても有意義なものであった。また、ケールマイアー氏は2018年マウトハウゼン強制収容所解放記念式典において、当時極右政党と連立を組んでいたオーストリア政府の代表者たちを前に、ユダヤ人犠牲者たちを深く悼み、レイシズムの傾向のある政治家たちを痛烈に批判するスピーチをしたことで大きな注目を集めた。一般に非ユダヤ系作家たちはユダヤ人迫害について発言することは非倫理的であると遠慮する傾向にあるが、ケールマイアー氏は臆せずそこに立ち向かっている点で非常に考察に値する人物であると考えられた。次の科研費の申請テーマを現在検討中であるが、このような新たな展開も扱ってみたい。

①の範囲ではあるが直接面会がかなわなかった研究対象として、ノーベル文学賞受賞作家であるエルフリーデ・イエリネクについて言及しておきたい。ウィーン大学客員研究員としての所属先はイエリネク研究所であり、代表者であるピア・ヤンケ教授、その研究員であるスザンネ・トイチュ氏、クリスティアン・シェンカーマイアー氏とは親しく交流した。研究所は世界的に有名なイエリネク・アーカイブでもあり、上演記録から、貴重な資料が大量に保管されている。基本的にはそこに通い、閲覧と複写を行った。彼らは頻繁に国際シンポジウムを開催しており、それらにはすべて参加させてもらった。テーマはいくつかあったが、『芸術と政治』の回がとりわけ興味深かった。研究者のみならず、俳優や脚本家、映画監督なども招き、学問の枠にこだわらず新たな発見の可能性を追い続ける姿勢が実に興味深いものを感じられた。イエリネク本人は精神的な問題から長く隠遁生活を送っており（ノーベル文学賞スピーチもビデオでの登壇となった）、直接会うことは今日実に難しくなっている。しかし、2020年3月には極右政党の政治家のスキャンダルを題材とした新作“Schwarzwasser“がウィーン・アカデミー劇場で上演され、存在感の強さを見せつけられた。

次に、②作品に関わる史跡等での資料収集について報告する。科研費での

研究テーマとの関係で、いまなお残るナチズムの傷跡を実際の場所との関連で論じたいと考えていた。在外研究で直接現地に行けるということで、オーストリア国内でいくつかの場所を重点的に調査した。まずは、ウィーン・ペンツィング(14区)にあるオットー・ヴァーグナー病院には足しげく通った。ここにはナチス占領期にアム・シュピーゲルグルントと呼ばれる実験施設があり、知的障害のある子供たちが人体実験によって安楽死させられていた歴史がある。この計画に携わった医師ハインリヒ・グロスは、研究上のものであったと主張し戦後も罰せられることもなく生き延び医師としての研究を続けていた。(このようなことが許される点がドイツとオーストリアの差である。) 第二世代の作家が彼を題材とした作品を書いていることもあり、以前から関心を持っていたが、今回直接訪問し、病院内の資料館で研究をすることが出来た。子どもたちの脳は取り出されホルマリン漬けにされていたが、それが公式に中央墓地に葬られたのはようやく2002年のことである。ドイツ・ベルリンでも同様の人体実験は<T4作戦>として有名だが、巫夢・シュピーゲルグルントはまだ知られていない。この件についても、作品と関連付けながら論じたいと考えており、今回直接訪問し、資料館を訪れ、多くの資料を得ることが出来たことは喜ばしいことであった。

同様の場所として、ウィーン・オペラ座裏にあるアルベルティーナ広場の警告碑の問題もある。1988年に除幕された、アルフレード・フルドリチュカ作の<戦争とファシズムに反対する警告碑>もまた、作家たちが作品で題材かする歴史上の問題作である。この全部で4点から成る彫刻には、這いつくばって地面を磨くユダヤ人像がある。これはナチスがオーストリアを併合した際、ユダヤ人たちに無理やり道路を清掃させた出来事が下敷きとなったものであり、みじめな姿で形作られた彫像に傷つくユダヤ人は多かった。この彫刻に関して、ローベルト・シンデルも作品化し、ルート・ベッカーマンもインタスレーションを行っている。この彫刻を巡る問題についても論文にするつもりなので、作品の写真を撮影し、シンデル氏とベッカーマン氏に直接話を聞くことが出来たことは有意義であった。

他にも、ネストロイ広場にある破壊されたシナゴグの記念碑とそこに立てられた、小劇場ハマコム(Hamakom、ヘブライ語で<場所>)に通うことが出来たことも喜びであった。これらをぜひ論文として形に残してゆきたい。

オーストリア国外では、ホロコースト博物館、記念碑がどのような試みによって<想起の文化 Erinnerungskultur>を体現しているのかを追った。ホロコーストの体験者たちが高齢化し次々に世を去っている現実を前に、その記憶を思い出させるようにと作られた数々の記念碑、博物館は、良心の疚し

さを思い出させる煩わしい存在であることもアライダ・アスマンらによって指摘されている。もっとも、プラハ、ブダペストなどのかつて大きなユダヤ人コミュニティを擁していた地域では、今日ユダヤ文化は重要な観光資源となっている。シナゴグ、ホロコースト記念館にはいつも観光客の長い行列が見られ、観光バスのルートには必ず入っている。そのため博物館も21世紀にリニューアルされたものも多く、ジェイムズ・ヤングの提唱する〈カウンター・メモリアル（対抗記念碑）〉のように、単純な記念碑ではなく、省察的に考えさせるような工夫が凝らされたものが多いのにも驚かされた。ワルシャワ、ブダペスト、ベルリンのユダヤ博物館（ホロコースト記念館）の技巧を凝らした展示方法には、〈想起の文化〉との関係が色濃く表れており、考察に値するものとして、研究に組み込んでいきたい。

ここまで述べてきたように、在外研究中は研究テーマと直接関連する題材や作家たちと密にかかわることができ、実に貴重な経験を得ることが出来たと感じた。もっとも、3月上旬に、北イタリアから突如ヨーロッパに新型コロナウイルスの感染が全土に拡大してからは、都市封鎖や国境封鎖が一気に進み、最後は帰国を予定より10日早め出国せざるを得ず、お世話になった方々に直接の挨拶も出来なかったのは残念であった。もっとも、シンポジウムなどのオンライン配信化が進むきっかけともなり、研究上はメリットもあるのではと感じている。この研究中知り合った方々と、従来とは違う形で交流していけるのではないかと感じている。